

2 0 2 4 年 度

入 学 試 験 問 題

国 語

注 意

- ・問題は①から④までで、13ページにわたって印刷してあります。
- ・試験時間は50分です。
- ・声を出して読むではいけません。
- ・解答用紙はA4判のオモテとウラに分かれてあります。
- ・答えは、問題の指示に従って、解答らんの決められた場所に濃く、はっきりと書きなさい。
- ・答えを直すときは、きれいに消してから、新しい答えを書きなさい。
- ・字数指定のある問いはすべて、句読点・記号も一字と数えるものとします。
- ・答えはすべて別紙解答用紙に明確に記入し、解答用紙のみを提出しなさい。
- ・解答用紙には受験番号、氏名を記入しなさい。
- ・数字や文字は枠の中に正しくはみ出さないように記入しなさい。

(正しい例)

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

(誤った例)

1	2	3		5
---	---	---	--	---

学校 東洋大学
法人

東洋大学京北中学校

1 次の問いに答えなさい。

問一 ぼう線部のカタカナを漢字に直しなさい。解答らんは解答用紙のウラ面です。

- (1) 味にうるさい客を満足させるのはシナンのわざだ。
- (2) 私と兄の性格は、家族なのにタイシヨウ的です。
- (3) ジョウリュウとは、液体を加熱して気体にし、それを冷やして液体にもどす作業のことである。
- (4) ドローン^{ドローン}をソウジユウする。
- (5) 眠りはアンソクだ。私は眠ることが何よりも好きだ。

問二 次の作品の冒頭文を読み、その作品名をア～オからそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- (1) 祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響きあり。沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらはす。奢れる人も久しからず、ただ春の夜の夢のごとし。
- (2) 月日は百代の過客にして、行かふ年も又旅人なり。舟の上を生涯をうかべ、馬の口とらへて老をむかふる者は、日々旅にして旅を栖とす。
- (3) ゆく川の流れば絶えずして、しかも、もとの水にあらず。よどみに浮かぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとどまりたるためしなし。

- | | | | | | |
|---|------|---|--------|---|-----|
| ア | 源氏物語 | イ | おくのほそ道 | ウ | 徒然草 |
| エ | 方丈記 | オ | 平家物語 | | |

問三 (1)～(4)のことばの対義語を、ア～クの熟語から選び、それぞれ記号で答えなさい。

- | | | | |
|--------|--------|--------|--------|
| (1) 名目 | (2) 質疑 | (3) 精密 | (4) 一般 |
|--------|--------|--------|--------|

- | | | | | | | | |
|---|----|---|----|---|----|---|----|
| ア | 具体 | イ | 粗雑 | ウ | 故障 | エ | 実質 |
| オ | 異常 | カ | 応答 | キ | 特殊 | ク | 調査 |

問四 ぼう線部の敬語の種類をア～ウから選び、それぞれ記号で答えなさい。

- (1) 母の代わりに私が参りました。
- (2) お探しの本はこちらでございますか。

- | | | | | | |
|---|-----|---|-----|---|-----|
| ア | 尊敬語 | イ | 謙讓語 | ウ | 丁寧語 |
|---|-----|---|-----|---|-----|

問五 ぼう線部の主語を、波線部ア～オから選び、それぞれ記号で答えなさい。

- (1) 私たちはバスに乗って、おじいさんの家に行つた。
- (2) 将来の僕の夢は、医師となつて多くの人の命を救うことです。

2

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

無言で水遣りをして回る彼女の後を、航大は付いて歩く。既に聞きたいことは聞き、伝えたいことは伝えた。立ち去ることもできたが、そうはしなかった。何となく、彼女は迷っているように思えたからだ。打ち明けるべきか否か、彼女の頭の中で議論が交わされている気がした。

三年生の校舎も済ませ、最後に西棟へと向かう。廊下を歩く生徒の数が増えている。

西棟に到着すると、銀色のシンクの上で、ガザニアが黄色い花卉を元氣いっぱい大きく広げていた。

A

「あれ？」と航大が反射的に呟く。

「どうかしたの？」

「いや、この花、昨日見たときと見た目が違うと思って」

昨日は勘違いだろうと思っただが、やはり花卉の開きが変化している。いまの状態は初めて目にしたときと同じで、昨日は花卉が立っていた。

航大の疑問は、凜が即座に解消してくれた。

「それはたぶん、昨日の天気のせいだよ。ガザニアは日光が当たると花を開いて、陽が沈むと花を閉じる習性があるの。昨日は太陽がほとんど顔を出さずに薄暗かったから、花卉が閉じかけていたんだと思う」

「詳しいな。……って、そうか。同じ花を家で育てているんだっけ」

「お母さんがね。私もたまに世話をするけど」

言いながら、凜はシンクへと近付く。蛇口を捻り、じょうろに水を汲みながら、ガザニアの花を見下ろす。

B

「私がこの花を嫌いって言ったこと、憶えてる？」

「そういえば、そんなこと言ってたな」

ガザニアへ向けられた凜の視線は冷たく、刺々しかった。

「この花を見ていると、自分の嫌なところを見せつけられているようで、ウンザリするんだ」

「……綺麗な花に見えるけど」

凜が溜め息を吐きながらかぶりを振る。

「見た目の話じゃないよ。太陽が出ているときだけ明るく花を開いて、夜には花を閉じている。そういうところが嫌いな。人前でだけ必死に明るく振る舞う自分の二面性を見ているようで、苛々する」

唐突な告白に目を丸くする航大を尻目に、凜がさらに続ける。

「私、本当はあんなに明るい性格じゃないんだ。むしろその逆。陰気で、内向的で、物事をネガティブな方向にばかり考えちゃう。それが本当の私。学校での私は、皆の前で元氣な女の子を精一杯演じているだけ」

そう打ち明けられても、簡単に信じることはできなかった。航大にとって、凜のイメージは学校一の明朗快活な女の子だ。持ち前の明るさでいつも周りの人間を元氣付けてきた彼女が実は演じられていたものだったなんて、すぐさま受け止めることなどできない。ただ、嘘をついているわけではないことは、彼女の目を見ればわかった。

凜が蛇口を閉める。水道の音が止むと、静寂が際立った。

「うまくいってないの」

凜がポツリと眩く。

「何が？」と航大が短く先を促す。

「今度の劇の稽古。順調なんて言ってたけど、本当は全然なんだ。嘘ついでごめんね」

「そうなのか？ 壮太も順調と言っていたけど」

航大の言葉を聞き、凜が口元を歪める。

「それが問題なの」

「どういふことか、と航大は首を傾げる。

これまで我慢していた分を吐き出すように、凜は大きく溜め息を吐いた。

「正直、劇の完成度は低い。でも、他の部員の皆はいまの出来でもう満足しちゃってる。それが私の悩み」

C

「ああ」と航大は声を洩らす。ようやく、彼女の悩みが理解できた。

熱量の差。運動部でもしばしば起こる問題だ。演劇だって、チームスポーツに似た性質を持っているのだろう。個々人の理想や目標にギャップがあれば、自然と歪みが生まれてしまう。

「そのこと、部員同士で話し合ったりとかは？」

「していない。というか、できない。いま、部内の雰囲気はすごく良いから、それを壊すのが怖い」

②諦観の滲んだ口調で、凜が答える。部員たちの目線の低さを嘆いているわけではなく、うまく皆を引っ張っていけない自分の不甲斐なさを恥じているかのようだった。

航大は、じつと凜の横顔を見詰める。苦しそうというより、迷子みたいに心細そうな顔をしている。このまま文化祭当日を迎えれば、演

劇部の部員たちは満足するだろう。しかし、それは凜の目指すゴールとは程遠い。彼女の心が満たされることはない。理想と現実とのギャップに加え、部長としての責任感が彼女を蝕んでいる。舞台の成功の線引きをどこにすべきか、決めかねているのだ。

凜がもう一度溜め息を吐いて、続ける。

「人から嫌われることが怖いから、仲間外れにされないように周りに合わせて笑って、空気を読まない言葉を口にしないように、いつも神経を張り巡らせている。その結果、部長なのに部員に演技の要求ひとつできない。他人の目ばかり気にして、ひとりで勝手に思い悩んでいる。滑稽だよ。私はそんな薄っぺらな人間なんだよ」

凜の言葉は、何度も読み上げられたセリフのように淀みなかった。声に出さずとも、ずっと抱え続けてきた想いだったのだろう。胸の奥底に溜め込んでいた自らへの不満が、堰を切ったように溢れ出している。

困り果てる友人の横顔を眺めていると、腹の底から強い感情が湧き上がってきた。彼女の助けになりたい、問題解決のための力になりたいという気持ちとが全身を巡り、体が熱を持ち始める。自分の中にある目に見えない何かが、アクセルが踏み込まれるのを待つ車のように振動している。

D

「薄っぺらじゃないだろ」

余計な一言はさらに彼女を傷付けることになるかもしれないと知りながら、航大は反論した。指摘せずにはいられなかった。

凜が航大に視線を向ける。彼女は痛みに耐えるように眉根を寄せていた。濃い黒色の双眸が、慰めの言葉などいらないと拒絶している。

自分が刃物を手にしているような気分になり、航大は息を呑む。これから口にしようとしている言葉は、果たして彼女のためになるのだろうかと不安になる。口を閉ざし、沈黙に身を委ねたくなった。腰に手を置き、大きく息を吐く。サッカーをしていたころ、PKを蹴る前に必ずやっていたルーティンだ。肺の中の空気と一緒に、不安と弱気を体外へと追いやる。緊張がほぐれ、心が落ち着いてきた。一度口から出た言葉をなかつたことにはできない。勢いに任せて、航大は続ける。

「誰に頼まれたわけでもないのに早起きして学校の花を世話しているような人間が、薄っぺらなわけがない」

「そんなの、たいしたことじゃないよ」

謙遜ではなく、本心からそう思っているのだろう。凜の声には、突き放すような刺々しさがあつた。

怯まずに、航大は言葉を重ねる。

「俺が同じことをしていたら？」

「え？」

「俺や他の誰かが凜と同じことをしていても、たいしたことじゃないと思う？ それくらい普通のことだ、って」

「それは……」

凜は言葉に詰まり、困ったように眉をひそめた。沈黙が、彼女の答えを雄弁に語っている。他人に優しく、自分に厳しい。それは立派な心持ちだが、それ故に自らの美点を素直に受け入れられないことは、彼女の明確な欠点だ。屋根より高いハードルを見上げて嘆息するなんて、それこそ滑稽だ。

プランターに植えられた花の姿が頭に浮かんだ。一見すると美しい

その花も、よく観察してみれば、咲き終わり、枯れた花をいくつもその身に付けたままにしている。重苦しく、辛そうだ。

いまの自分に、彼女の悩みを解決する力はない。しかし、彼女が抱えている不要なものを取り除くことくらいなら、自分にもできるのではないか、と航大は思う。花がらを摘むように、不当に彼女の心を重くしているものたちを、ひとつひとつ取り払う。それも、彼女の力になるということではないだろうか。

E

「誰だって人から嫌われることは怖いよ。俺もそうだ。いまだって、自分の行動は凜にとつて迷惑なんじゃないかって不安になつてる」

「そんな。迷惑なんかじゃないよ」

両手を大きく左右に振り、慌てた様子で凜が否定する。その大袈裟な仕草が余りにいつも通りで、航大は少し緊張がほぐれた。

X 普段の明朗快活な姿を、凜は本当の自分ではないと言つた。でも、咄嗟に顔を出した彼女の一面は、航大のよく知る彼女だった。やはりその顔も、彼女を形づくる一部なのだ。たとえ演じていたものであつても、偽りではない。そのことにホツとした。

肩の力が抜ける。重く考えることなんてではないかと思えてきた。普段通り、軽口のキャッチボールをするみたいに、思い付きを口にすればいい。それくらい気楽な方が、相手だって変に緊張しないで受け止められる。

(真紀涼介『勿忘草をさがして』東京創元社)

*1 双眸……両目の瞳のこと。

*2 嘆息……なげいて、ため息をつくこと。

問一 凜がガザニアの花を嫌う理由について説明した次の文の空欄にあてはまることばをそれぞれ□内の文字数で文中からぬき出して答えなさい。

太陽が出ている時だけ明るく花を開いて、夜には閉じているというガザニアの①三文字が、人前では明るく振る舞う一方で②五文字なものと考え方ばかりしている自分を見ているように感じられるから。

問二 ぼう線部①「水道の音が止むと、静寂が際立った」とありますが、この表現の効果についての説明として最も適切なものをア～オから選び、記号で答えなさい。

ア 互いに相手の話を聞こうとして訪れた静けさを表現することで、自分のことより相手の気持ちを第一に考えてしまう航大と凜の人の良さがはっきりと伝わる。

イ はりつめたような静けさを表現することで、相手の意外な一面に驚く航大と、本音を打ち明けようとする凜の間に流れる緊張感がよくうかがえる。

ウ 凜の打ち明け話と静けさを重ねることで、大きな衝撃を受けた航大と、真実を話してすっきりした凜との、正反対の心情がくつきりと浮かび上がる。

エ 悩みを告白する前に静けさを表現することで、嘘をつき続けてきた凜の罪悪感や、嘘に気づくことの出来なかった航大の自分を責める気持ちをうまく描き出している。

オ 物音に注目させ、静けさを強調することで、相手の意外な一面を冷静に受け止めようとする航大と、告白に興奮している凜の正反対ともいえる姿勢を浮き彫りにしている。

問三 ぼう線部②「諦観」とありますが、これは「あきらめの末に世間的な事柄にこだわったり、振り回されたりしなくなる」という意味をもつことばです。凜は〈何を〉あきらめ、〈何に〉こだわらなくなりつつあるのでしょうか。本文の内容と見比べて最も適切なものをア～オから選び、記号で答えなさい。

ア 明朗快活にふるまうことをあきらめ、周りの人間を元気づけることにこだわらない。

イ みんなを引っ張ることをあきらめ、部員たちを満足させることにこだわらない。

ウ 部員との熱量の差を埋めることをあきらめ、自分の目指すゴールにこだわらない。

エ 自らへの不満を胸の奥底に溜め込むことをあきらめ、部内の雰囲気をもつことにこだわらない。

オ 人から嫌われないようにすることをあきらめ、自分をよく見せることにこだわらない。

問四 本文からは、次の文章が抜けていますが、文中のA～Eのどこに挿入するのが適切だと考えられますか。記号で答えなさい。

突然の衝動に航大は驚くが、戸惑いはなかった。懐かしい。自分はこの感覚を知っている。サッカー部を辞める前、悩むことが嫌いだ。自分は、いつだって思いのままに行動していた。

問五 ぼう線部③「航大は息を呑む」とありますが、このときの航大の気持ちについての説明として最も適切なものをア～オから選び、記号で答えなさい。

- ア 自分の過去の経験と凜が置かれている状況は違うのに、共感しているかのような態度をとることで相手を傷つけてしまったのではないかとふいに気づき、強い不安を覚えている。
- イ 思い悩む凜に対し、友人として助言したいと思う気持ちは強くあるものの、自分の発言が彼女の怒りにふれ、何らかの不利益を被ってしまうかもしれないことにおそれを抱いている。
- ウ 悩みが原因で凜が快活さを失っているのなら、自分の経験から助言することで元の彼女に戻ってくれるのではないかと思いつつ、それは出すぎた行為なのではないかとためらいを感じている。
- エ 困り果てている彼女の助けになりたいとは思いつつも、今まで悩み事を隠してきたような凜が素直に自分の手助けを受け入れてくれるのだろうか、いぶかしく思っている。
- オ 自分のあり方に深く思い悩んでいる凜に対して不用意に慰めめ言葉をかけることは、かえって彼女を傷つけることになるのではないかとためらい、緊張している。

問六 文中の **X** から始まる二段落における航大の気持ちとして最も適切なものをア～オから選び、記号で答えなさい。

- ア 話をしていくうちに凜が普段通りの姿を見せるようになったことで、先ほど思い悩んでいた姿は彼女の本来のものではなかったのだと納得した。
- イ それまで快活な姿しか見せてこなかった凜が悩みを語り助言を求めてきたことで、本音を話してくれたのだと実感して嬉しくなった。
- ウ 普段から本音を話すことのない凜と花の水やり作業を共にすることで、彼女の抱える悩みを解決させることが出来たと達成感を覚えた。
- エ 暗い胸の内を明かした凜が自分の励ましを聞いて普段どおりの様子を見せたことで、明るい面も彼女の本当の姿だったのだと安心した。
- オ いつもと違った凜の表情が自分の話を聞いてすぐいつも通りに戻ったのを見て、今抱えている悩みも深刻ではないようだと思子抜けした。

問七 本文中の表現の特徴として最も適切なものをア～オから選び、記号で答えなさい。

ア 植物の水やりをしながら歩く場面の時間の経過とともに、植物の状態が凜の心理状態にあわせて変化していることが効果的に表現されている。

イ 凜の抱えている悩みの内容が、航大や部員たちとのやりとりの中で徐々に明らかになっていき、結果的に解決に向かうよう話を展開させることで、物語にメリハリをつけている。

ウ 航大のせりふが途中まで短いあいづちしかないことから、凜の深刻な悩みを理解することのできない彼の幼さが読み取れる。

エ 自分への不満を抱える凜を目の前にしたときの航大を描いた場面では、思いのままに行動し発言するという冷静さに欠ける性格が浮き彫りになっている。

オ 凜を励ます航大が過去を思い返している表現からは、彼がサッカー部で経験したことが人を理解し勇気づけるために役立っていることが分かる。

3

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

なお、問題作成の都合上、一部表記を改めたところがあります。

定住化の原因については、より詳細な議論が必要であろう。

A、定住化の過程についても、それが漁具の出現と並行していること、水辺で起こっていることなど、他にも興味深い事実が見出される。

あまり横道に逸れないために、ここでは次の点を確認しておくこととどめよう。人類はそのほとんどの時間を遊動生活によって過ごしてきた。B、気候変動等の原因によって、長く慣れ親しんだ遊動生活を放棄し、定住することを強いられた。いま私たちはその定住がすっかり当たり前の風景となってしまう時代を生きている。

定住化の過程は人類にまったく新しい課題を突きつけたことだろう。人類の肉体的・心理的・社会的能力や行動様式はどれも遊動生活にあわせて進化してきたものだからである。だとすると、定住化はそれら能力や行動様式のすべてを新たに編成し直した革命的な出来事であったと考えねばならない。

その証拠に、定住が始まって以来の一万年の間には、それまでの数百万年とは比べものにならない程の大きな出来事が数えきれぬほど起こっている。農耕や牧畜の出現、人口の急速な増大、国家や文明の発生、産業革命から情報革命。これだけのことが極めて短期間のうちに起こった。これこそ、西田が定住化を人類にとっての革命的な出来事と捉え、「定住革命」の考えを提唱する理由に他ならない。

C、その革命の中身は具体的にはいかなるものであったのだろうか？ 人類はいかなる変化を強いられたのか？ またいかなる課

題を乗り越えねばならなかったのか？ 引き続き、この革命がもたらした大きな変化について見ていこう。

生活していればゴミが出るし、生きていけば排泄物が出る。したがって定住生活者は、定期的な清掃、ゴミ捨て場やトイレの設置によって環境の汚染を防がなければならない。私たちはそうしたことを当たり前と思っている。そうじをしなければならぬことも、ゴミをゴミ捨て場に捨てることも、トイレで用を足すことも。

しかし、定住革命の視点に立つなら、これらはすこしも当たり前ではない。遊動生活者は、ゴミや排泄物のゆくえにほとんど注意を払わない。理由は簡単だ。彼らはキャンプの移動によって、あらゆる種類の環境汚染をなかつたことのできるからである。遊動生活者にはポイ捨てが許されている。

するとこう考えることができる。数百万年も遊動生活を行ってきた人類にとって、そうじしたり、ゴミ捨て場をつくったり、決められた場所でのみ排便したりといった行動を身につけるのは容易ではなかったのではないか？

まずゴミについて考えよう。いま文明国の多くがゴミ問題に悩まされておき、ゴミの分別をしきりに市民に教育している。だがうまくいかない。

② これはある意味で当然のことである。ゴミというのは意識の外に放り捨てたものだ。もはや考えないようにしてしまったもの、それがゴミである。ゴミの分別とは、そうして意識の外に放り捨てたものを、再び意識化することに他ならない。考えないことにしたものについて再び考えなければならぬのだから難しいのである。

遊動生活を行っていたときにはこのような課題に直面することなどなかった。食べたら食べかすを放り投げておけばよかったのだから。

定住生活を始めた人類は新たな習慣の獲得を強いられた。定期的な清掃活動を行い、ゴミはゴミ捨て場に捨てるという習慣を創造せねばならなかった。たとえば貝塚のようなゴミ捨て場を決めて、そこにゴミを捨てるよう努力した。

重要なのは、そのときの困難が今日にも受け継がれていることとだ。ゴミの分別がなかなか進まないこと、そうじがまったくできない人がいることは、この困難の証拠なのである。

次にトイレについて考えよう。子育てをしたことのある人ならだれでも知っているが、子どものしつけで一番大変なのが、トイレで用を足すのを教えることである。

よく考えて欲しい。オムツをつけた幼児であっても、立ち上がり、駆け回り、話をし、笑う。おべっかなどの高度な技術を使って大人に自分の要求を飲ませようとすることもしばしばだ。彼らは生物として極めて高度な行動を獲得している。

それにもかかわらず、彼らは便所で用を足すことができない。それは周囲からの粘り強い指導の下でやっと獲得できる習慣である。

現在、布オムツから紙オムツへの移行によって、オムツ離れの時期が遅れてきていることが指摘されている（かつては二歳前でオムツ離れをすまることがほとんどだったが、いまでは三歳や四歳を過ぎてもオムツ離れできないことも珍しくない）。これは、決められた場所での排泄を行うという習慣が、人間にとってすこしも自然でないことのあるに他ならない。だからこれほどまでにそれを習得することが困

難なのである。

特定の便所を設けないという文化は数多く存在する（ヴェルサイユ宮殿にトイレがないのは有名な話だ）。そもそも排泄行為を我慢することほどつらいものはない。

そうじやゴミ、そしてトイレについての考察は、定住革命というものの困難を教えてください。人類は大変な苦勞を重ねて、ゴミと排泄についてのエートスを獲得してきたのだ。

しかもそれだけではない。ここから分かるのは、定住革命が、かつて人類が一度だけ体験した革命ではないということである。たしかに人類はある一定の時期に定住革命を成し遂げた。だが、定住生活を行う個々の人間もまたその人生のなかで定住革命を成し遂げなければならないのである。少なくとも二つ、すなわち、トイレで用を足すようになること、そして、そうじを行い、ゴミをゴミ捨て場に捨てるようになることである。定住生活を行う私たちは苦勞をしてこの革命を成し遂げている（もちろん成し遂げていない人もいるが、それはすこしもおかしなことではない）。

定住革命は **X** である。定住革命はいまここでも（トイレやゴミ捨て場で）行われているのだ。

遊動民が死体をもって移動することは不可能である。だから死体はそこに置いていかれる。

だが、定住民にはそうはいかない。だから、特別の仕方、置いておく場所を作らなければならない。それが墓場だ。実際、考古学においては、墓場がゴミ捨て場と並び、定住生活の開始を徴づける重要なメルクマールになっている。

こちらに生きている者の場所があり、あちらに死んだ者の場所がある。定住は、生者と死者の棲み分けをもとめる。

すると、死者に対する意識も変化するだろう。あの場所にはあいつの体がある。でも、あいつはどこに行ってしまっただろう……。

死体の近さは、死者だけでなく、死への思いを強めるはずである。それは、やがて、霊や霊界といった観念の発生につながるだろう。それは宗教的感情の一要素となる。

定住社会では、コミュニティのなかで不和や不満が生じて、当事者が簡単にコミュニティを出ていくことができない。そのため不和や不満が蓄積していく可能性が高い。

学校でのクラスのことを考えると分かりやすいだろうか。ケンカや仲違いなどの不和が起こっても、生徒は毎日同じクラスに行って、同じ席に座らなければならない。だが想像してみたい。もし、席が毎日自由に決められたら？ しょっちゅう勉強の場所が変わったら？ 少なくとも、不和が、すべてが固定されている場合と同じように堆積していくことはないだろう。新しい環境が人々をリフレッシュさせ、それこそ、水に流すことも多くなるに違いない。

定住社会の場合にはそうはいかない。したがって、不和が激しい争いになることを避けるためにさまざまな手段を進展させる必要がある。「これはしてもよい」「これはしてはいけない」といったことを定める権利や義務の規定も発達するだろう。

争いが起こったときには調停が行われるだろうが、そこで決定した内容を当事者たちに納得させるための拘束力、すなわち何らかの権威の体系もはぐくまれることだろう。法体系の発生である。

ちなみに、遊動狩猟民は、一般に、食料を平等に配分し、道具は貸し借りする。これは遊動民なりの、不和を避けるための技術と考えることができる。驚くのは、過度の賞賛を避ける習性をもっているということだ。ブッシュマンの社会では、大きな獲物を捕らえてきた狩人は、頭を下げて、そつとキャンプに戻り、ひっそりこっそりと獲物を皆の目に付くところに置いておくのだという。過度に賞賛されて、権威的存在が避けるのである。

(國分功一郎『暇と退屈の倫理学』新潮社)

*1 西田……西田正規のこと。彼は著書『人類史のなかの定住革命』において「定住革命」を提唱している。

*2 エートス……道徳的な慣習・行動の規範。

*3 メルクマール……目印。指標。

*4 ブッシュマン……アフリカに住む狩猟民族。

問一 A C にあてはまることばの組み合わせとして最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

- | | | | | | | |
|---|---|------|---|-------|---|-------|
| ア | A | また | B | だが | C | では |
| イ | A | 一方で | B | ゆえに | C | したがって |
| ウ | A | そして | B | なぜなら | C | たとえば |
| エ | A | つまり | B | しかし | C | また一方で |
| オ | A | たとえば | B | したがって | C | つまり |

問二 ぼう線部①「遊動生活者にはポイ捨てが許されている」とはどういうことですか。その説明として最も適切なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア 遊動生活者は生活の場をころろ変えるため、そのたびに新しい環境で気分をリフレッシュすることができ、いやなことがあっても水に流すことができるということ。

イ 遊動生活者は場所を移動しながら生活するため、過度にひと所を汚染してしまうことがなく、ゴミを出してもそのこと自体を振り返って考えなくてもすむということ。

ウ 遊動生活者が新たに定住生活を始めるにあたっては、今後さまざまな困難が待ち受けているため、一定期間に限ってのみ例外が認められているということ。

エ 遊動生活者は、自分たちにとって大切な人を亡くしても死体をもって移動することができないという制限があるため、特別にポイ捨てが認められているということ。

オ 定住生活者と比べると、遊動生活者の方がゴミの処理の仕方に困難がつきまとうことは周知の事実であるため、世界的にもポイ捨てが許容されているということ。

問三 ぼう線部②「これはある意味で当然のことである」とありますが、なぜそう言えるのですか。「これ」の指す内容を明らかにしながら、四十文字以上、六十文字以内で理由を説明しなさい。解答らんは解答用紙のウラ面です。

問四

ぼう線部③「決められた場所で排泄を行うという習慣が、人間にとってすこしも自然でないことのあらわれに他ならない」とありますが、ここで筆者が主張していることとして最も適切なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア オムツの開発によって、また布オムツからより快適な紙オムツへの進化によって、幼児だけでなく大人も決められた場所だけで排泄を行うという習慣づけの必要性をあまり感じなくなっているということ。

イ ゴミを分別した上でゴミ捨て場に捨てるという習慣と同様に、決められた場所で排泄を行うという習慣を獲得することを大人の見栄^{みえ}のために幼児に求めること自体が不自然で無理のある行為であるということ。

ウ 数百万年も移動しながら生きてきた人類にとっては排泄物のゆくえを考える必要がなかったため、定住化によって決められた場所でのみ排泄を行うということ自体が負担^{ふたん}を強いる大きな変革^{へんかく}であったということ。

エ オムツを必要とする幼児であっても、自分の満たしたい要求を大人たちにつきつけるという極めて高度な行動ができるため、排泄に関する粘り強いしつけなど必要なく自然にできるようになるものだけということ。

オ 歴史的に見ても、特定の場所にトイレを設置しないという文化はいまだ世界各地に根強く残っており、それを画一的に決められた場所だけで行うよう統一^{いつぱ}を図^{はか}っていくことが今後いっそう求められるということ。

問五

☒に入ることはとして最も適切なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア 今も世界のどこかで行われている、そうじ革命・ゴミ革命・トイレ革命の三大革命

イ 長い人類史において、かつて遊動民から定住民となる際に一度だけ体験した革命

ウ 人類にとって避けられない通過儀礼^{ぎれい}であり、かつての遊動生活者が成し遂げた革命

エ 人類史上の出来事であると同時に、定住民がその人生のなかで反復しなければならぬ革命

オ 人類誰もに例外なく訪れる試練であり、人生において二度必ず成し遂げなければならない革命

問六 ぼう線部④「大きな獲物を捕らえてきた狩人は、頭を下げて、そつとキャンプに戻り、ひっそりこっそりと獲物を皆の目に付くところに置いておく」のはなぜですか。その理由を説明したものととして最も適切なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

- ア 獲物を捕らえてきた狩人自らが狩猟民族皆の食料を分配する役割を担ってしまつと、どうしても自分の分だけ多くとろうとする心理が働く傾向があり、食料を平等に配分できなくなるから。
- イ 狩猟の際には獲物を仕留めるための道具が必要であり、自分の道具ではなく他者から借りた道具を使って仕留めた場合に限つては、その道具の持ち主の獲物とする暗黙の了解があるから。
- ウ 皆の目に付くようなわかりやすい場所に獲物を置いたのは、大きな獲物を仕留めるには大変な労力が必要であり、それを見事成し得た狩人は遊動民の仲間からたたえられる存在であるから。
- エ 遊動民の特性として持たざる者は持てる者から取ろうとする傾向があるので、大きな獲物を捕らえることができた狩人は、自分とその家族を守るためにいさかいを避けようとするから。
- オ 大きな獲物を捕らえる能力を持つ狩人が過度にほめたたえられると、その狩猟民の中で優劣関係が生じるおそれがあり、そうした事態を避けて狩猟民どうしの仲たがいを防ぐ必要があるから。

問七 次のア～オから本文の内容に当てはまらないものを二つ選び、記号で答えなさい。

- ア 私たちが当たり前であると思つているゴミをゴミ箱に捨てることやトイレで用を足すことは、定住革命の視点に立つならばそれを習慣化させるまでには大変な努力が必要であり、困難がともなうものであつた。
- イ 遊動民は新しい環境のなかで生活に必要な情報や資源をすばやく入手しなければならぬため、定住民と比べるとゴミの分別やトイレで用を足すことを覚えるのに時間が多くかかつてしまうのは当然である。
- ウ ゴミの分別がなかなか進まないこととそうじができない人がいることは、人類が定住生活を始めた際に生まれた新たな習慣の獲得にともなう困難が、今日の私たちにも受け継がれているという証拠である。
- エ 定住生活者が墓場とゴミ捨て場を並べて設置することで生者と死者の棲み分けを求めるのに対し、遊動生活者は心理的に生者と死者の棲み分けをするため「霊界」の観念の発生につながり、それが宗教を生んだ。
- オ すべてのが固定化されているために不和や不満が蓄積していく可能性の高い定住社会では、激しい対立や争いを避けるために「権利」や「義務」の規定を発達させる必要がある、その結果として法体系が発生した。

1

問一 解答らんはウラ面です。

問五	問四	問三	問二
(1)	(1)	(1)	(1)
(2)	(2)	(2)	(2)
		(3)	(3)
		(4)	

1

□

2

問一 ①

問七	問六	問五	問四	問三	問二	問一
						①
						②

2

□

3

問一
問二
問三 解答らんはウラ面です。

--	--

3

□

4

解答らんはウラ面です。

問七	問六	問五	問四

受験番号

□	□	□	□	□
---	---	---	---	---

氏名

□	□	□	□	□	□	□	□	□	□
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

合計

□	□
---	---

1 問一 解答らんはウラ面です。

完答1
問五 問四 問三 問二

(1)	(1)	(1)	(1)
ア	イ	エ	オ
(2)	(2)	(2)	(2)
ウ	ウ	カ	イ
		(3)	(3)
		イ	エ
		(4)	
		キ	

問五以外各1点

10

2 問一 ① 二面性 ② ネガ テイ フ 各3

問七	問六	問五	問四	問三	問二
オ	エ	オ	日	ウ	イ

問一以外各4点

30

3 問一 問二 問三 解答らんはウラ面です。

問一	問二
イ	ア

完答4
問七 問六 問五 問四 問三 問二 問一 解答らんはウラ面です。

問七	問六	問五	問四	問三
イ	オ	エ	ウ	
				エ

問三以外各4点

24

(順不同)

4 解答らんはウラ面です。

合計

氏名

受験番号

